

Title	磯野直秀著 モースその日その日 : ある御雇教師と近代日本
Sub Title	N. Isono, Morse day by day : a foreign teacher and modern Japan
Author	杉浦, 章介
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.2 (1989. 7) ,p.402(214)- 407(219)
JaLC DOI	10.14991/001.19890701-0214
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890701-0214">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890701-0214</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



磯野直秀著

『モースその日その日：  
ある御雇教師と近代日本』

（1987年刊行，有隣堂：横浜，320頁，付注記及び略  
年表）

I

一人の秀れた知性や偉大な感性の持ち主の生涯や、その生きた時代、社会を知ることは、その業績や作品の理解にとって不可欠であることは言うまでもないが、それでは、そうした人物の評伝を書くという仕事は、どのような要請に応えようとしてなされるのであろうか。

それには、概ね次の三つの場合が挙げられよう。第一に、その人物の名は知られており、その業績や作品について言及されることは多いにしても、その生涯、とりわけ、業績や作品が創造されるに至る様々な事由、歴史的、文化的背景との関連性については断片的にしか知られておらず、憶測の域を出ないような時、こうした関係を明らかにする場合である。

第二には、たとえ既に定説となっている、その人物を描いた評伝があり、それなりの歴史的な位置付けがなされているとしても、その後の考証や、史資料の発見等によって定説を補ったり、場合によっては、定説そのものを修正することが必要になった場合である。

そして最後に、その人物の果たした役割や影響が、時代や地理的文脈を超えて、優れて現代的な意味合いをもつものと考えられる場合である。いわば、過去の傑出した人物の生涯と業績、作品を語ることを通じて、現代という時代や社会に潜む問題の姿を、その人物像という鏡の中に映し出し、その中から新たな問題提起を行な

おうとする場合である。

磯野直秀氏（以下「著者」と略す）による本著は、上述の三つの評伝叙述の要請のいずれにも、同時に応えようとするものである。一方では、入念な考証と史資料のつき合せによる、地道な、過去の再構築を行なうとともに、通説、俗説に存在した曲解、不明な点をただして行く。しかし、それと同時に、モースとその時代、19世紀中葉の日米両国における新興科学の生態や、大学制度の実態を明らかにしつつ、学術研究の過程やその本質に言及したり、学問の国際交流の望ましいあり方についても、優れて現代的なコメントをつけ加えることも忘れない。その意味で、本著は、単に偉大な御雇教師の生涯を克明に叙述した評伝であるばかりではなく、日本の社会、特に大学という学問の府が明治以来、抱えこんできた多様な課題についての鋭い問題意識によって書き下された問題提起の書でもある。

以下において、先ず、本著の構成と内容について、やや詳しく述べ、そして、次に、著者が、どのようにして、上述の評伝叙述の三つの要請に応えているかについて、各々の点毎に検討を加えてみたい。

エドワード・シルベスター・モース (Edward Sylvester Morse) は、1838年、アメリカのメイン州に生まれ、1925年、マサチューセッツ州セーラム市で没した、動物学（腕足類）、博物学の研究者であり、全米科学振興協会 (AAAS) の会長を務めるとともに、後半生は、セーラム市のピーボディ科学アカデミーの理事長として36年間、科学の普及と研究発展の為に尽したが、ボストン美術館への日本美術、工芸品の寄贈とその分類により、アメリカにおける日本文化紹介者として、その後の日本研究に強い影響を及ぼしたことによって知られる。

しかし、日本においては、何よりも先ず、明治初期（1877～79年、明治10～12年）、いわゆる「御雇い外人教師」として、発足間もない東京大学で生物学を講じ、滞日中に、大森貝塚を発見し、

その発掘によって日本における考古学的調査の進展に大きな足跡を残したことによって知られる。と同時に、大森貝塚の発見者という以上の、この人物についての知識は、明治という時代が歴史となるにつれて、次第に研究の最前線に身を置く者にさえ、遠く忘却の淵へすべり落ちて行ったことは否定できない。それ故にこそ、皮肉なことに「教科書的知識」としてのモースは、ますます「大森貝塚の発見者」ということで片付けられるようになり、標本室の薬品のにおいの中で、セピア色の「記念切手の人物」と化してしまっている。著者は、この科学者であり教育者、そして類い稀な日本理解者である一人の傑出した人物を現代に再び甦らせようとする。モースとは一体、どんな男だったのだろうか。何故、維新聞もない日本にやって来たのだろうか。そして、日本でどんな仕事をし、激動の時代を観察していたのか。更に、モースは、日本の学問の発展にどのような関わりをもち、又、その膨大な日本古美術、民具の収集は、いかにして行なわれたのか。

このモースについての評伝は、四部の構成からなっている。先ず第一部においては、出自(1838年)から日本到着(1877年)までを、特に、当時のアメリカにおける博物学、生物学研究との関わりで述べ、そして、第二部では、新生東大の教授就任(1877年)にまつわるいきさつから、一時帰国(同年)までの半年あまりの間の数々のエピソードをつづる。来日二日目にして、横浜から新橋へ向う途上、車中より大森貝塚を発見したあのエピソードもここに含まれる。

つづく第三部においては、翌年(1878年)家族とともに再訪した後、東京大学はじめ、様々な場所において生物学のみならず、時代の思潮として思想界、宗教界を揺がした進化論の講話を繰り広げ、果敢に教条的キリスト教信仰者とわたりあって行く姿が描かれ、そして、東大との契約満了に伴う離日をもって終る。最後の第四部では、アメリカに戻った後の研究者としての

活躍とともに、日本の古美術、特に陶芸と民具の収集、分類にうちこむ姿を中心に、再来日の実現、旧友、弟子との再会、その後の多忙な日々の有様を紹介する。そしてアメリカに戻った晩年の静かな、しかし精力的に仕事を続ける日々を描き、最期の日のエピソードによって結ばれている。

## II

モースは何よりも先ず「ヤンキー」であった。ニューイングランドに生まれ、清教徒の厳格な父親に反撥を重ね、その分だけ、開明的で自立的な母親の影響を強く受け、生物、特に淡水貝、陸貝に興味を持つようになり、それが、モースの生涯の第一の方向付けをする。東大教授に就任する程であるから、さぞかし、立派な学歴をもっていただろうと誰しもそう思うが、しかし、モースは独学の人であり、若くして自活の道を選ぶ。

持って生まれた絵ごころ、スケッチ能力は製図工として身をたてることを可能としたが、この比類なき形態把握と素描能力は、後日、日本における生物学講義、更には日常生活においても多彩なコミュニケーション手段となる。日本語が充分でないモースは、その絵によって異国の人の心をつかむことができた。そして、素描能力によって日本文化の日常生活の観察力は磨き澄まされ、その表現力によって膨大な民具、生活史を採取し記録することができた。

青年モースが貝の収集と分類に夢中になっていた頃のニューイングランドには、博物学の長い伝統があった。著者は、モースの学問的系譜を博物学(Natural History)の中に位置付け、後年の日本文化への関心のあり方それ自体も実は、その展開にあったとする。

素人のマニアにすぎなかったモースが専門家となるきっかけは、ハーバード大学ローレンス科学校(現理学部)のルイ・アガシー教授との出逢いであり、その結果、モースは、当代一流

の学者の指導を受けるとともに、数多くの優秀な同僚、後には、全米の科学界の指導者となる友人を得ることになる。

結局、恩師アガシーとは決別することになるが、著者は、モースらの弟子がアガシーから離反した理由は、俗説のようにダーウィン進化論をめぐる対立ではなく、弟子が集めた生物学標本のコレクションの所有をめぐる対立だった、と記している。熱心なキリスト教徒で、ヨーロッパの大学から新天地をみだしてやってきた学界の権威の学風は、モースには、どこか肌合がよくなかったのかも知れない。後年、東大構内に居を構えた時も、他の外人教師とは、四重唱をしたりする程の親交ぶりであったにもかかわらず、医学部に属するベルツ教授はじめドイツ人学者とはうまくいかず、シーボルトとは確執があったとされている。それには、ヨーロッパの学統の権威が学歴もない若いアメリカ人を見くだしていたとも考えられる。ところで、博物学者にとってコレクションはいかに大切なものか、想像に難くないが、その膨大なコレクションを収集できるのが、腕足類の場合、日本近海であることを知った時、モースは、人生の一大転期を迎える。まさに宝の山にわけ入る気持で日本にやってくるが、しかし、モースは、東大教授として招聘されたのではなく、三ヶ月程の研究調査の目的で横浜に上陸する。

翌朝、前年開通した鉄道で新橋に向かうがその途上、大森貝塚を発見する。まさに、モースと日本との運命的な出逢いを象徴するかのよう。そして、新橋の駅頭で出迎えた東大関係者の中に、文学部教授の外山正一がいた。その外山が、モースに東大での講演を依頼した折、自身もミンガン大学の留学中、公開講義でモースの講演を聴いていたことを伝える。またも運命の糸は、モースを日本へと結びつける。この講演の結果、モースは、東大と二年間の契約を結び、教授に就任することとなる。

この第一部から第二部にかけての叙述は、明治初頭の若々しい躍動と、前例も規則も少ない

草創期の社会のもつ清々しさを感じさせる。東大にしても、なおそうだったのである。と同時に、時代の流れの中で、一人の人間の運命が次々と変転し、思わぬ世界が開かれて行くことを、小説よりもなお真実に読者に語りかけてくる。

東京大学との契約の後、モースは、次々と自分の仕事をこなして行くが、教育に臨んでのモットーは、恩師アガシーの言葉「書物ではなく、自然に学べ」(Study Nature, Not Books)であった。モースは、教場よりも、実験室や、野外実習で熱弁をふるうことも少なくなかった。

著者は、モースが就任した当時の東大構内を考証により再現し、東京大学創設に至る経緯を含めて、当時の教授陣容や担当科目等を詳述しているが、これによって、現在とは極端に異なっていた、いわば「三四郎以前」の東大のイメージが鮮明に浮び上がってくる。

やがて半年余り過ぎた時、契約に基づいて五ヶ月余の一時帰国の途につくが、その折、モースに課せられた使命は、大量の書籍と標本の購入、ならびに物理学と政治学の新任教授を探して行くことであった。そして彼の選んだ二人は、メンデンホールとフェノロサであった。前者は、後に日本の物理学と地球物理学の基礎を築くことになるが、日本への船中で知りあった二人の日本人とは長く交遊が続いた。金子堅太郎と団琢磨がその二人であった。まさに、「坂の上の雲」の世界が、時代にみなぎっていたとしか言いようがない。

一時帰国の後、再び東大に戻ったモースは以前にもまして多忙の身となった。弟子達は講義ノートを整理して教科書の類を製作しはじめ、モースも北海道、東北行を行なう。この再訪後の時期を描く第三部の白眉は、一般聴衆を対象とした、一連の公開進化論講演であろう。著者は、周到に、進化論をとりまく内外の状況を解説し、更に、社会的ダーウィニズムの日本への受容経過についても詳細に検討している。それによって、何故、あれ程までに、キリスト教徒の同僚から激しく反論され続けたのか、また同

時に、奇妙にも、一般日本人のみならず知的指導者からも、国権派、民権派を問わず熱烈に受け入れられたかが分かる。

この進化論受容の過程について、著者は一章を設けて、その理由と問題点を仔細に検討しているが、著者自身の学問観が冷静な議論のうちに披歴されている。この点については最後に再び取り挙げたい。

多忙の結果、神経症と消化不良となり、気分転換の必要から街を散歩しはじめたモースの眼にとまったのが、ホタテガイの形をした陶器の刺身皿であった。これがきっかけで、やがて陶器に魅せられ、当代随一の陶芸鑑定家、蜷川式胤に入門する。その後は、貝を集める少年のように、モースは手当たり次第に至る所で陶器を集め始める。こうして、膨大なモース・コレクションが始まる。しかし、モースの収集態度は、他の収集家と異なっていた。後にモースは、このコレクションについての詳細な分類を行ない目録を作成するが、しかし、著者は、モースの究極の目的は、こうした膨大なコレクションを、進化系統関係によって体系化することにあつたのではないかと推測している。モースは、あくまで博物学者であった。

残り少なくなった日本滞在の日々を文字通り、東奔西走し、腕足類やその他の貝の収集と陶器のコレクションに費やした。そして新生東大での生物学研究発展の為に、理学部博物場の設計に没頭した。来日以来、モースは動物学の標本と考古学の資料の充実に腐心してきたが、当初の江の島臨海実験所（後の東大三崎臨海実験所へと発展）の開設の頃、わずか300点余りにすぎなかった標本も、半年程の間に6107点に増大し、更に一時帰国の際にもアメリカ産の標本類を収集している。次は、これらの標本をいかに体系化するか、博物場の設置は、モースの夢であった。しかし、その後の日本の科学の方向は、その夢の実現を完全に裏切るものとなった。

アメリカに戻った後、モースは、セーラムのピーボディ科学アカデミーの館長に就任する。

第四部は、帰国後のモースの活躍が、生物学のみならず、日本についての講演など幅広いものであったことを描く。そして、ボストンの富豪の出身、ビゲローとの出逢いは、モースをして、再度の日本行を決意させる。ビゲロー、フェノロサ、そして若き日の岡倉天心と関西から山陽へと日本古美術収集の旅を続ける。旅の一夜、モースらが、美術品の散逸と流出を憂うるのを耳にした時、岡倉は、国宝制度の必要を痛感し、その実現に奔走することになる。

しかし、モースの日本文化理解の態度は、こうした貴重な文化遺産というよりも、むしろ、日常生活の至る所で観察される事物であり、民具であった。それらについての詳細な観察記録は、後に、『日本の住まい (Japanese Homes and their Surroundings)』にまとめられる。それは、住居の博物誌であり、日本人の生活の民族学的報告書であった。

再び研究の静寂さの中へと戻ったモースは、収集によって生じた膨大な借財を清算することもあり、モース・コレクションをボストン美術館に移管し、その分類カタログの作成にとりかかり、完成させる。

帰国後も、日本との交渉は続き、モースを訪れる日本人は後をたたなかった。日清、日露の両大戦に際しては、日本への理解ある発言を行ない、世論に少なからぬ影響を与える。更に、関東大震災の報に接した時、全焼した東大総合図書館に、死後、全蔵書を寄贈する旨、遺言を書き換えたりもした。そして、その最期の日まで、モースの博物学への若々しい情熱と、日本と日本人への暖かな態度は変わることがなかった。

### III

モースの活躍についてのエピソードは数多く、その業績や遺した収集品については現在も言及される機会が多いが、しかし、その生涯について記されたものとなると、極く限られたものし

か存在しない。その一つは、言うまでもなく、モース自身が晩年、滞日中に書き送った膨大なメモ風な日記を整理した、『日本その日 その日 (Japan Day By Day)』であるが、その他でまとまったものと言えば、ウェイマン (Wayman, D. G.) の『伝記』ぐらいである。こうした限られた情報を軸に、著者は、書かれなかった断片を一つ一つ丹念に収集し、そして、前掲二著の接合を試みる。更に、モース自身の記憶違いや、伝記の中の解釈について、反証を挙げながら、実像を明らかにして行く。その意味で、本著は、評伝叙述の第一の要請に見事に応えている。

それでは、第二の要請、即ち、既存の人物像の修正や補正、更には、新しい視点という点ではどうであろうか。

若き日のエピソードとして、恩師アガシーとの決別の節で、著者は、その対立が、進化論をめぐるものではなく、動物学標本の所有をめぐる行きちがいであったとしているが、この例など、明らかに、歴史家の視点というよりも、むしろ、同じ動物学の研究者としての著者の視点が浮き上がってくる。本文中に数多くの専門名や動物用語が顔を出すか、多くの場合、図版等によって具体化されて、専門外の読者を飽きさせることがない。また、大森塚発見後、直ちに、東大を通じて、東京府から、その発掘の独占権を手に入れるが、これなど、外国人教師間の競争を表わすとともに、科学的探求の実際にあったものみに、よく理解できるエピソードである。このように、本著は、気の遠くなるような歴史的考証作業から生まれた評伝であるばかりか、同じ学問分野に身を置く科学者の眼から描かれたユニークな評伝でもある。

しかし、本著のもつもう一つの特徴は、その現代性であり、それが提起する根源的な問題意識に溢れているという点であろう。

19世紀中葉、ダーウィンの進化論が、欧米の学界や精神界に巻き起こした嵐の大きさと激しさは、想像に難くないが、しかし、進化論それ自体のもつ、文化的精神的風土の理解なくして

は、表面的な受容や拒絶に終わってしまう。まさに、明治初期の日本の知識階級は進化論を「モノ」として受容し、自らの都合にあわせて解釈した。こうした、近代日本の進化論受容の過程のもつ問題性について、著者は、(1)仏教的世界観が生き物の変転という概念になじみ易かった、(2)日本では猿が身近な存在であった、(3)明治期において、「適者生存」「自然淘汰」は眼前の事実であった、(4)キリスト教への反感があった、そして、(5)進化論以前の生物学が知られていなかった、の諸点を挙げている。特に、最後の点について、ダーウィン以前の生物学者が、進化論を認めなかったのは、信仰上の理由だけではなく、既存の自然観、静的で機械的世界像と相容れないためでもあったと指摘している。まさに、ここにみられるのは、科学史家トマス・クーンの言うところのパラダイム・シフトの好例と言えよう。更に、著者は、より根本的な問題として、日本における進化論の受容が、極めて表面的なものにすぎなかったこと背景に、西欧に確固として存在してきた、自然観、博物学的知見の蓄積が、日本には欠落していた点を挙げ、「土壌のないところに理論の真の意味が根付くはずもない」と鋭く指摘している。

学問が花開く土壌を耕すことなく、最先端の成果のみを追い求めた近代日本の科学は、次の世代には、モースらの残した豊かな学問的風土を根絶し、標本類や博物場を片隅に追いやって省ることがなかった。著者は、ここでも、博物館の軽視が、日本の自然科学の発展を歪めてきたとして、現状について批判を加える。

また、モースが大森塚発掘調査について英文だけでなく邦文でも報告書を残すよう努力しているが、人類学や考古学が世界的規模で調査を行なっている中で、果して、どれだけのものが、現地人にも理解できるような形で発表されているか、と問いかける。学問の国際交流が唱えられる中で、真の交流とは何か、その根本問題を著者は提起している。

こうして、著者は、モースという一人の人物

像を通して、近代、更には、現代の日本の学問の抱えてきた問題について、新しい視点を提供してくれる。経済学をはじめとする、社会科学も決して、その例外ではない。

全篇に横溢するモースの人柄についての著者の暖かな眼は、モースその人の魅力と同時に、著者自身の真摯な学問的態度と人間性の現われ

と考えられる。この評伝のもつ魅力は、「先人の跡を求めるなかれ、先人の求めたるものを求めよ」という精神によって貫かれていることにあると言えよう。

モースは、人を得て、再び現代に甦ったと感ずるのは評者一人ではあるまい。

杉浦章介（経済学部助教授）